

## メバル類の文献リストアップと研究の現状

池 原 宏 二

(日本海区水産研究所)

昭和57年度の第10回日本海ブロック増養殖研究推進連絡会議の後で、メバル類の増養殖研究について、各県がバラバラで行うよりも連絡をとり効率的に研究を行うことを目的として、メバル類担当者会議が発足した。それ以後毎年、増養殖推進連絡会議の後で8~11機関の担当者が集まり、機関別にその年のメバル類研究の経過、次年度の計画、お互いに協力できる事項等の意見交換を行ってきた。

昨年の担当者会議では、日本海側で増養殖対象種としてのクロソイ、メバル、カサゴ及び現在、種苗生産のための親魚養成が行われたり、人工魚礁の対象種であるウスメバルについて、文献目録を1年後に機関別、魚種別、項目別にとりまとめることが申し合わされた。

今回「メバル類文献目録」に収録したものは印刷されたもので引用文献として利用できることを基準としたが、必ずしも全部の機関が同一基準にあるとはいえない。メバル類文献目録の作成にあたって、日本海側の12府県をはじめ、北海道から福島各県、静岡県、各海区水研、養殖研、日栽協、北大水産学部などにメバル類に関する報告、情報の提供について協力を依頼し、これまでに566編の報告が集まって、文献目録が出来上がった(第1次集約分)。

文献からみた各機関における研究対象種はそれぞれの地先に生息し、漁獲対象となっている種の報告が主であり、各海域の漁業とメバル類の分布とが密接な関係にあることが伺える。

クロソイの文献はこれまでに212編集まった(表1)。青森~新潟県で87編、北海道~福島県で69編、日水研、東北水研、日栽協など11機関で190編とこれらで全体の90%を占めており、特に北海道と東北地方の研究機関に集中している。これはクロソイが比較的低水温域に生息し、成長が早く、丈夫で、飼育しやすい魚種であるためといえる。他に石川~山口県、広島、愛媛、大分県など日本海側全域と瀬戸内海の一部の県でも研究が行われている。

ウスメバルの文献は同様に86編あり、このうち漁業が盛んな青森~石川県の報告が42編、日水研も含めると64編で全体の74%を占めている。他は京都~島根県、北海道~茨城県、東北水研など日本海側と津軽暖流域の影響下にある海域からのものである。他に東シナ海での漁獲に関する西水研の報告がある。一方、鹿児島~千葉県の黒潮流域県からの報告が全くないのが注目される。

メバルの文献は83編あり、最も多いのは大学で19編、本州及び北海道各県では1~7編である。しかし、四国と九州各県からの報告は福岡県の1報告だけである。

カサゴの文献は151編ある。日本海側では福井~山口県、太平洋側は鹿児島~静岡県にかけての機関から報告されている。日本海北部や東北地方のカサゴの報告は少なく、クロソイと対照的である。

次に、これらの文献の報告内容を種苗生産、標識放流など10項目に分類して、いずれが取り扱われているか表2に示した。

表1 メバル類の機関別魚種別文献数\*

機関**	クロソイ	ウスメバル	メバル	カサゴ	その他	機関**	クロソイ	ウスメバル	メバル	カサゴ	その他
日水研	15	22	5	5	0	岩手	3	2	5	2	5
東北水研	6	3	1	0	3	宮城	15	1	2	0	0
南西水研	0	0	4	2	0	福島	18	0	7	0	1
西水研	1	1	2	3	2	茨城	0	1	1	0	0
養殖研	0	0	0	5	0	静岡	0	0	0	17	0
水産庁	0	0	1	0	0	三重	0	0	1	14	0
青森	21	19	1	0	2	岡山	0	0	1	1	0
秋田	27	2	1	0	2	山形	0	0	0	2	0
山形	13	0	0	0	0	愛媛	2	0	0	19	0
新潟	26	15	2	0	0	高知	0	0	0	2	0
富山	0	0	0	0	0	福岡	0	0	1	6	1
石川	1	6	6	0	0	大分	1	0	0	6	0
福井	0	0	4	4	0	長崎	0	0	0	2	1
京都	3	2	3	3	1	宮崎	0	0	0	7	0
兵庫	1	3	5	5	0	鹿児島	0	0	0	6	0
鳥取	0	0	2	1	1	大分	3	2	19	17	11
島根	0	2	0	0	0	日裁協	13	1	0	4	0
山口	1	0	4	15	0	日水資保	0	0	0	1	1
北海道	33	4	3	0	2	その他	0	0	2	2	1
合計	212	86	83	151	34						

\* 昭和63年2月現在収録したもの

\*\* 道府県は水試、栽漁センターを含む

表2 日本におけるメバル類の項目別文献数量\*

魚種	種生	苗産	標放	識流	分布	餌食	料性	成長	その他	分類	資源	漁業	養殖
クロソイ	83	39	48	14	18	54	8	6	25	14			
ウスメバル	6	9	41	12	16	38	4	6	23	7			
メバル	8	1	26	10	9	40	11	1	16	2			
カサゴ	83	31	13	15	18	42	5	9	14	5			
その他	1	0	9	4	10	19	4	1	7	0			
合計	181	80	137	55	71	193	32	23	85	28			

\* 昭和63年2月現在収録したもの

種苗生産：現在、種苗生産が行われている魚種はクロソイとカサゴである。種苗生産が確立されているといってもクロソイの歩留りは年による変動がみられている。メバルは石川県が種苗生産を行っていたが、発育段階の初期のへい死が多く、現在行われていない。ウスメバルは天然の親魚の確保が困難なため、流れ藻に蛸集した稚魚を採集し、それを親魚まで養成している。親魚になるまで少なくとも4、5年以上かかることから、種苗生産がいまだに行われていない魚種の1つである。

標識放流：種苗生産されたクロソイやカサゴの移動、行動、放流効果、資源増加などを目的に各地で標識放流が行われており、それに関係した文献が多い。ウスメバルについては親魚の移動や魚礁効果判定のための新潟県の報告があるにすぎない。

分 布：各県で魚種目録，あるいは北海道，秋田，福井，岩手，宮城県では地先で漁獲される魚類の図鑑を発行している。他に魚礁や卵・稚仔調査で出現したメバル類の報告を分布の文献として扱った。特に分布を論じた文献が少ない。

その他生態：メバル類は人工魚礁や天然礁に蝟集する代表的魚種で，かつ高級魚であることから，各地の海域総合開発調査の対象種としてとりあげられている。この項目の多くはこれら魚礁関係の文献であり，魚礁の項目を別に起こす必要があった。

分 類：分類を学術的に論じた文献である。最近ではタヌキメバルが報告されたが，魚類学会の発表はタヌキメバルでなく，キツネメバルと同一種であると判定した。

資 源：メバル類の統計が整備されておらず，各県で担当者が苦勞して漁獲量を調査している。この4種の中で最も多く漁獲されるのは群をなすウスメバルである。ウスメバルは成長が遅く，年々漁獲量が減少し，体長は小型化しつつあり，流れ藻に蝟集する稚魚の量も少なくなっている。

「メバル類の機関別・魚種別・項目別文献目録」をみると，どの県が何を対象種としてとりあげ，どういった項目を研究しているかがわかる。説明不足のところは各人でこの表と文献目録を利用して補っていただきたい。

## [質疑応答]

中西（日水研） 文献リストを作るにあたって注意された点は何か。また，文献リストを作るのにどれぐらいの日数を必要としたか。

池原 多くの文献を集めるために多くの機関にメバル類文献目録作成の主旨を説明し協力を得た。しかし，頁など記述ミスもかなりあり，第1次集約をもとに全部原本にあたる必要がある。約4カ月を要した。

杉山（秋田水振セ） 文献目録作成についての依頼機関はどこか。また，リストアップされた文献の入手は日水研において可能か。

池原 日本海側12府県，北海道～宮城県，静岡県各水試，日裁協，北大水産学部，東北，南西，西海水研である。クロソイ，ウスメバル，メバルの各文献は日水研にほとんどあるが，カサゴの文献はほとんどない状態である。